



毎月一回一日発行
昭和40年2月20日
第三種郵便物認可

4-1999

憲法守り国民とともに歩む 即位十年、平成流が定着

高橋 紘

(共同通信社ラジオ・テレビ局長)



宮中慣行大幅に変更

「平成流」とは、今の天皇の言動が昭和天皇と違い、普通の人と同じように行動することを指す。昭和天皇が亡くなられてから十年。今の天皇、皇后が結婚されたのは昭和三十四年四月十日だから、今年で結婚四十年になる。

平成の今の天皇と昭和天皇は全く違う環境でお育ちになり、違う環境で学ばれ、青春時代を送られた。昭和天皇の場合は六人のお学友と大正三年から七年間、東宮御学問所で帝王教育を徹底的に仕込まれた。一方今の天皇は終戦を境に神の子から、突然、人間の子になって学習院に行き、同級生に「チャタレイ夫人の恋人」を借りたり、銀座に連れ出されたり、池袋へも行つたという、ごく

普通の学生生活を過ごされた。お二人の決定的な違いはそこにある。

今の天皇は即位礼の際も憲法が大事であると言われた。「国民とともに歩む」「憲法を守る」を二回ずつ強調された。憲法を守るということは今の平和憲法を大事にするという意味である。

昨年暮れの記者会見で、天皇の言動が昭和天皇とは随分違つたようだという質問があつて、天皇はこう述べた。「天皇の精神そのものはずっと変わらないものだ。しかし、時代とともに変わる部分があつてもいいと私は思う」

例えばご夫妻の行幸啓である。昭和天皇時代の行幸啓のスタイルは、都大路を園簿が肅々と行くという感じで、道路の中央を車列が進んだ。とこ

ろが今の天皇は、交通を遮断しては具合が悪いから、片一方は通つて下さいというやり方である。宮中の慣行も非常に変わった。かつては吹上御苑を散歩するときでも、必ず侍医が黒い薬箱を持つてついて回っていた。朝はおトウといつてトイレを見る。体温を計る、脈を診る、顔色を見る。そして侍医は日誌に「きょうは何の異常もなかった」と書く。おシツケという毒味があつた。そういうことは今は一切なさらない。天皇夫妻は宮内庁病院の人間ドックに入る。先日、皇后が病気になられたときは通信病院に入院された。

正田家と昭和天皇夫妻が一緒にお茶を飲むなどは考えられなかった。両家で親しく会つたことは一回もない。天皇と民間の正田家は格が違つたのだというのが宮中の考え方だ。

有名な話だが、美智子さんが御所に上がつてからは、両親と自由に往き来ができなかった。皇后のお母さんなのに孫(皇太子)が抱けない。これが昭和天皇と正田家の関係だった。こうしたことが皇太子妃選びの難点になった。民間の出身ということでのいじめられ、宮中に娘をやつたらあいつことになるのかと不安がられた。

そういう位階、勲等的なことにとらわれるようなことを今の夫妻はやめた。婚約期間中でも小和田雅子さんを御所の中に入れて皇太子と一緒にご飯を食べたり、天皇、皇后が学習院に行つたついでに、秋篠宮の奥さんの実家である学習院のキャンパスの中のLDKのアパートに行つたり、川

鳥家だの小和田家の人たちを呼んで一緒にご飯を食べる。親せき中集めて雅子さんを紹介する。ごく一般的なことをやっておられる。

皇后はこう言っている。「きつとどの時代にも新しい風があり、またどの時代の新しい風もそれに先立つ時代なしには生まれ得なかつたのではないかと感じています」

天皇の在り方は変わらないが、昭和にも新しい風は吹いた。現在も、また次の時代にも新しい風が吹くだろう。それが国民とともにということではないか。

平和問題に強いご関心

平成の天皇は平和問題に対して非常に強い関心を寄せておられる。「日本で忘れてはいけない日が四日ある。一つは四月二十三日の沖繩陥落、広島、長崎への原爆投下の日、それと八月十五日、この四日を忘れてはいけません。私のうちではその日は必ず黙とうをします」と言っている。戦争に対する思い入れ、とにかく戦争はいけないものだという気持ちを強く持つておられる。それは昭和天皇が結局、戦争責任をとらず、戦争に対して何もコメントせずに亡くなられた、そのマイナスを清算したいとの気持ちに通じている。

昭和天皇の側近の木戸幸一はA級戦犯だったが、日本が独立するに当たってこういうことを言っている。

「講和条約の成立したるとき皇祖皇宗に対し、また国民に対し責任をおとりあそばされ、ご退位

あそばされるのが至当なりと思う。それによって戦没者、戦傷者の遺家族、未帰還者、戦犯者の家族は何か報いられたようなご慰めを感じる。皇室を中心として国家的団結に資することはすこぶる大なるべしと思はる。しかし、もしかのごとくしかざれば皇室だけが責任をおとりにならぬことになり、何か割り切れぬ空気を残し永久の禍根となるにあらざるやを恐れる」

つまり講和条約の発効に当たって退位するか、お言葉を述べるか、何かした方がいいというわけである。これを吉田首相(当時)が退位に反対し、またこの期に及んで責任をとるようなことを言わなくてもいいと、進言を取り上げなかつた。これは木戸の東京裁判資料『木戸幸一尋問調査』に書いてある。

今の天皇はお父様の残された戦争の禍根というか、マイナスの部分をも自分の間に清算したいとの思いから、いろいろなことを実行している。

一番有名なのが沖繩である。沖繩海洋博のときひめゆりの塔の前で参拝して、火炎ビンが投げられた。沖繩と皇室の関係は大変複雑である。沖繩の人々は尚王朝の臣民だったのが、明治政府になって天皇の臣民となった。お陰で唯一国土で戦争があつた。沖繩は皇室に対して複雑な思いがある。

昭和天皇は結局、沖繩には行けなかつたが、今の天皇は皇太子時代を含めて七回行っている。一つの県に七回も行ったところはほかにない。沖繩では琉歌を読んで、伊江島にその石碑が建つてい

る。爆弾も投げられないし、倒されもしない、碑を欠かれることもない。今の天皇と沖繩は理解し合っている。硫黄島にも行っている。このようにして父親がやって今まで終わらなかつた戦争を清算しようとしているようだ。

こうした思いが何と個人にまで及んでいる。横井庄一さんを一九九一年春の園遊会に呼んで「長い間、ご苦労さんでした」と声を掛けています。翌年には小野田寛郎さんも招待された。昭和天皇も何かしたいという思いはあつたと思うが、その果たせなかつたことを今の天皇がこの十年間で幾つか果たしている。

天皇訪韓の行方

近く問題になりそうなもの一つは韓国訪問である。近く小淵首相が韓国に行くが、そこで天皇訪韓について詰めてこようという話がある。韓国としては二〇〇二年のW杯サッカーの前に来てほしいというのだが、果たして行けるかどうか。韓国からは全斗煥、盧泰愚、金泳三そして現在の金大中大統領と四代の大統領が続いて訪日している。こちらから答礼しないわけにいかない。昭和五十九年に全大統領が日本に初めて来た。そのときにお言葉の問題が出て昭和天皇が謝つた。

次の盧大統領のとき、またお言葉問題が出た。前回のお言葉は、だれが遺憾の意を表明したのか、加害者はだれであつて被害者はだれなのか、さっぱり分からない、きちんと主語を置いて謝れというわけだ。結局、昭和天皇は二回目に「わが

国によつてもたらされたこの不幸な時期に貴国の人々が味わわれた苦しみを思い、私は痛責の念を禁じ得ません」と述べた。つまり私、昭和天皇は、と入れさせられたわけだ。これが日韓関係で複雑な問題になつてゐる。金大統領のときも問題になつた。外交決着というものは、どこの大統領、元首が来てても一事不再理だが、韓国の場合は何回も繰り返す。これが非常に大きなしこりになつてゐる。

私は天皇の今の気持ちを考えると韓国へは行きたいだらうと思つ。昭和天皇がなし得なかつたことを少しづつやつていく。沖繩と皇室の問題は深いわだかまりがあつたが、一歩ずつやつてきた。石を投げつけられようがどうされようが、とにかく自分で行つてお互いに和解した方がいいという気持ちだと思つ。

皇位継承と皇室典範

皇位継承も話題になつてゐる。皇室には秋篠宮を最後に男の子がいなくて、女の子ばかりだ。これでは今の皇室典範によると、天皇制がなくなつてしまふ。

皇室典範では、皇位は皇統に属する男系の男子が継ぐとあり、養子をとつてはいけなないとある。皇太子は三十九歳、秋篠宮が三十四歳。紀宮が三十歳、秋篠宮家に二人、寛仁親王に二人、高円宮家に三人それぞれお子さんがいるが、いずれも女の子である。

明治の皇室典範では、皇嫡子孫、皆あらざると

きには皇庶子孫による継承を認めていた。側室の子でよいというのだ。百十五代・桜町天皇以降、桃園、後桜町、後桃園、光格、仁孝、孝明、明治、大正の歴代天皇はいずれも側室から生まれてゐる。えい児死亡率が高く、子供は生まれるが、その日のうちに死んだりしてゐる。その予備措置として側室制度があつた。近代の例でも明治天皇には六人の側室があり、柳原愛子という人から生まれたのが大正天皇。

大正天皇には四人の男子がいた。昭和天皇は女官改革をやり側室制度を廃止、大正天皇時代までいた側室は一切なくなつた。しかし昭和天皇は側室を廃止したら男の子が生まれぬ、昭和八年にやつと今の天皇が生まれた。年代を見ると天皇と皇后の間には二年おきにきちつきちつと子供が生まれてゐる。これは大変なご努力だつたと思つ。今の天皇はご結婚後すぐに浩宮が生まれたが、皇室は一代おきに苦労される、ジंकクスがあるよつだ。

女帝、養子も選択肢?

それではどうするか。一つは女性の天皇を認めることである。天皇家の長女の紀宮さん、あるいは秋篠宮のお嬢さん。女帝の大きな問題は皇配をどうするかである。ヨーロッパでは各王室が親せき同士で、国の大小はあつても女帝が立てば他国の王族から配偶者をもらふ。日本の場合、皇族は臣下であり、臣下から皇配を連れてくるのは格が違つというわけだ。日本にも奈良時代に六人、江

戸時代に二人の女性天皇がいた。その方たちは中継ぎの天皇であつて臨時措置みたいなもの。寡婦あるいは生涯独身で、この方が亡くなればまた男系に戻つてゐる。皇室典範を改正して女帝を認めることになる。夫の問題があり、日本の歴史が始まつて以来、初めて天皇は女系になる。

もう一つの解決方法は養子をとることである。皇室典範には明文で養子をとつてはいけなと書いてある。皇室典範を改正してまで養子として迎えるに適當な方がおられるか。例えば旧東久邇宮家には昭和天皇の長女の成子さんが入つた。そのお子さんや孫、曾孫は昭和天皇家と直系である。しかし、いったん臣籍降下して普通の人になつた人を、そこまでして天皇にして天皇制を存続させるのかという問題もあるし、当の東久邇家側の問題もある。ほかの旧宮家も考えられるが、問題は簡単ではない。

とはいつても、この問題をいつまでも放つておくことはできない。象徴天皇は、国民の六、七割の間に定着してゐるし、昨年(一九九八年)の昭和天皇の誕生日に実施した共同通信社の世論調査では、五〇%が女性天皇でよろしいという数字も出てゐる。そこをどうさばるか。

いずれにしてもこのまま放つておいては皇室も終わる。皇室典範についての議論が、国民の間でもつとあつてもよからうと思つ。

(本稿は二月二十五日、同盟クラブの講演会から一部を要約、文責編集者)

一八六〇年代から日刊紙化 ニュージーランド新聞史

鈴木雄雅
(上智大学教授)

はじめに

東京朝日新聞(当時)の鈴木文四郎は「豪州・新士蘭の新聞に就いて」と題した一文を、昭和十三年版『新聞総覧』(日本電報通信社刊)に寄せられている。アジアを含めての、五月月に満たない駆け足旅行であったが、「この国の人ほど新聞を読むものは他に類がないそうである」「驚くことに、人口二、三万の都会でも、朝刊・夕刊と必ず二つの新聞が存在している」「ニュージーランドの新聞について私が感嘆させられたのは、センセーショナルに編集した新聞が皆無なことである」と述べている。当時は人口が現在の三百六十六万の半分もなかったが、地味な落ち着いた編集は、「一面この国の国民性による」と見抜いている。

ラグビーと羊で知られるニュージーランドの国土は日本の四分の三、そこに六十余りの新聞が今日ある。オークランド、ウエリントン、クライストチャーチ、ダニーデンの四つの主要都市で発行されている次の日刊六紙が知られている。

- 『ニュージーランド・ヘラルド』(朝刊) 二十五万部
- 『ニュージーランド・ポスト』(夕刊) 七万二千部
- 『ザ・プレス』(朝刊) 十万二千部
- 『ザ・スター』(夕刊) 十二万部
- 『ダニーデン』(人口十二万人) 五万一千部
- 『オタゴ・デーリー・タイムズ』(朝刊) 五万一千部
- 『エディター&パブリッシャー』(一九九八) 五万一千部

ウエリントン(人口三十三万人)

『ザ・ドミニオン』(朝刊)

六万四千部

『イブニング・ポスト』(夕刊)

七万二千部

クライストチャーチ(人口三十三万人)

『ザ・プレス』(朝刊)

十万二千部

『ザ・スター』(夕刊)

十二万部

ダニーデン(人口十二万人)

『オタゴ・デーリー・タイムズ』(朝刊)

五万一千部

「エディター&パブリッシャー一九九八」このうち幾つかの新聞は、以下植民地新聞界を述べる中に垣間見られるように、長い歴史をもつ。

初期新聞界

先住民マオリが住んでいたニュージーランドにイギリスが本格的に入り込むのは、オーストラリアへの入植が一段落する一八四〇年代初めのこと。それとともに、新聞が植民地社会に登場する。

サミュエル・レバンスは入植団が上陸した北島の南端、ポート・ニコルソン(後年首都となるウエリントン)で、一八四〇年四月十八日、『ニュー

ジーランド・ガゼット』を創刊し、ニュージーランド「新聞の父」という栄誉を得ている。

オーストラリアから派遣されたホブソン大佐がニュージーランド全域に英国の主権宣言をするのが五月二十一日であったから、それより以前のことであった。さらに興味深いのは、新天地と入植者への情報を満載した第一号が既に前年の八月、ロンドンで発行されていたことである。その意味では、同紙は植民地で最初に印刷、発行された新聞とも言える。

レバンスはロンドンで印刷技術を習得した後、一八三〇年カナダに移住し、同地最初の日刊紙『モントリオール・デーリー・アドバタイザー』を創刊した男でもある。英国の著名な入植促進論者E・G・ウエイクフィールドの知遇を得ての新聞発行となったようだ。

コロンビア式印刷機を使い発行部数は百部をわずかに上回る程度と少なく、うち二十部をウエイクフィールドが買い上げていた。それでも植民地で最初に印刷された第二号に限っては四百部、さらに追加百五十部が印刷されたという記録が残っているから、当時としてはたいした数である。

四ページ建ての一部一シリングで始められた『ガゼット』は、『ウエリントン・スペクテーター』あるいは『ブリタニア・スペクテーター』といった題号を付け加えながらも一八四四年九月まで続き、レバンスが経営と編集の仕事に携わった。

植民地最初の新聞が現れてからわずか二月月後

の同年六月、初代植民地総督となったホブソンが屋敷を構えた北島の北端にあるベイ・オブ・アイランズで『ニュージールランド・アドバタイザー&ベイ・オブ・アイランズ・ガゼット』が創刊された。同地は入植初期における漁業を中心とした一般貿易の中心地であったからシドニーやフランス、イギリスからの船と人々でにぎわっていた。編集発行人は牧師B・クワイフだった。

同紙を継承する形で『官報(ニュージールランド・ガバメント・ガゼット)』も発行されているが、ホブソン総督自身も政府主導の新聞発行を計画、ワイテマタ(オークランド)に移ってからの一八四一年七月に『政府ガゼット』を創刊した。入植直後に現れた新聞は直接、間接的に入植を促進したニュージールランド会社(ニュージールランド協会、ニュージールランド土地会社の発展した組織で、入植促進活動を行った)および入植地に設立されたその子会社の支援を受けていたものが少なくない。しかし、植民地政府が課する発行保証金のあまりの高さに、初期の新聞のいずれも発行を続けるのはほとんど不可能だったことも、また事実である。

オークランド

英国に併合されたあと首都になったオークランドには、次第に人々が集まりだした。一八四一年に入ると、オークランドで最初の新聞『ニュージールランド・ヘラルド&オークランド・ガゼット』が七月十日に現れた。冒頭で紹介した『ニュージ

ールランド・ヘラルド』(一八六三年創刊)と直接のつながりはない。『オークランド・ガゼット』は四ページ建て、一部一シリングで二百五十部ほど発行された。同紙はシドニーなどから三千ポンドの資金を集め、有力者の信託経営であったものの、植民地政府とぶつかり、翌年四月には姿を消している。

印刷人はJ・C・ムーア。初代編集人は「ニュージールランド最初の居住者」といわれ、製粉業の先駆者でもあったチャールズ・テリーという男で、植民地人の信頼を得ていた。彼の下、同紙は急激な人口増加が生んだ社会環境の不備(土地、住居、社会施設の不足など)にかみつき、さらに、教育問題や先住民への法的対策などを指摘した。二代目の編集人W・コーベットも土地問題で辛らつな論陣を張り、その座を引き降り降ろされている。なぜなら信託管理は政府役人に動かされていたからだ。

その後、オークランドには一時複数紙が存在したこともあったが、いずれも短命か、休刊日数の方が長いという新聞だった。

過渡期の新聞

さて、「ヘラルド」などが出現して安定した植民地新聞界が成立する十九世紀後半まで、いわば橋渡しの役割を演じた新聞数紙について触れておかねばなるまい。

その一つが『サザン・クロス』という植民地初の民間新聞(政府から独立していたという意味)

である。一八四三年四月二十二日オークランドに現れた同紙は約四半世紀の間、植民地社会の状況を報じた。創刊者はウィリアム・ブラウン。編集者は『オークランド・ガゼット』最後の編集長サミュエル・マーチンだった。マーチンは解任されたとき受け取った六百三十ポンド余の資金を元手にシドニーへ行き、良質の活字と印刷機を購入して、前の職場を見返そうとしていたところだった。

『サザン・クロス』はブラウン・キャンベル商会のブラウンが長い間所有していたが、経営が譲渡され一八六二年五月から同地最初の日刊紙『デーリー・サザン・クロス』に発展し、価格も一部六ペンスから三ペンスと半額になった。一八七六年、後述するA・G・ホートンの手に渡り、さらに『ヘラルド』に合併されたため、現存する同紙の歴史は『サザン・クロス』にまでさかのぼることができるともいえない。

スコットランド生まれのブラウンは一八三九年オーストラリアのアデレードに移住したのち、シドニー経由で一八四〇年二月ベイ・オブ・アイランズへやってきた。その船中で知り合ったのがロガン・キャンベルで、アデレードに滞在していたホテルの名から題号を考えたのも彼であった(題号は数度変わっている)。

もう一紙は一八四五年六月七日、一部六ペンスで創刊された週刊の『ニュージールランダー』。創刊者はジョン・ウィリアムソン。共同経営者は

W・C・ウィルソンだった。三年後には週二回刊となった。また一八五七年から三年ほど、『オークランド・ウィークリー・レジスター』という付録も出している。一八六三年日刊となり、一八六五年四月からは植民地最初のペニーペーパーとなったが、年末までには再び週二回刊と減り、翌一八六六年発行を停止した。

北アイランド生まれのウィリアムソンはそこ印刷技術を学んだ後、シドニー経由で一八四一年に植民地にやってきた。シドニーの『オーストラリアン・クロニクル』『モニター』で働き、前述の『オークランド・ガゼット』で仕事したのち宣教師が持っていた印刷機を買い取り、印刷人でもあり『ベイ・オブ・アイランズ・オブザバー』(一八四二年)など数紙の編集経験があったウィルソンと共同で本紙を発行した。ウィルソンは、後にウィリアムソンとたもとを分かち、『ヘラルド』を創刊する。

印刷業、書籍文房具業などと兼営ではあったものの、グレイ植民地総督派に近い紙面傾向で政府からの支援もあり、瞬間に『ニュージールランド』は植民地界をリードする新聞に成長した。彼らはそうした関係からか、政府印刷人に指名され、英国から蒸気印刷機や紙折り機の導入をはじめとして、リトグラフ機の輸入など、ニュージールランド印刷界の草分け的存在ともなった。

他方、『サザン・クロス』は自治政府の樹立などを声高に叫び、反政府、野党的な立場をとった。

南島ネルソン、オタゴなど

前二紙より一足早く南島では、北端のネルソンで『ネルソン・イグザミネーター』と『ニュージールランド・クロニクル』が一八四二年三月(一八七四年)に現れた。発行部数は二百部程度だったが、ウィリアム・フオックスら、後に政治家として頭角を現す投稿者が名を連ねた。

そして南東部のオタゴ地方に最初の入植者が入った一八四八年三月からわずか九カ月後、同年暮れにダニールデンで『オタゴ・ニューズ』(隔週刊)が発行されている。すぐに一部六ペンスで週刊化され、当時植民地で最も安い新聞であった。

一八五一年、創刊者のヘンリー・グラハムの死により、『ニューズ』は『オタゴ・ウィットネス』(一八五三年)に引き継がれたが、三千人の居住者に対して部数は百二十部から二百十部だった。とはいえ、利益を得ることは到底無理なことで、編集人のウィリアム・ヘンリー・カトンは競売業や端物印刷を営む傍ら、移民協会から得た年百ポンドの収入を新聞発行に回していた。しかしそれはニュージールランド初の日刊紙となる『オタゴ・デーリー・タイムズ』につながる。

『オタゴ・デーリー・タイムズ』はカトソンとジュリアス・ボーゲルが共同所有者となり、一八六一年十一月十五日、最初から日刊紙として創刊された新聞であり、前述した初期の植民地新聞状況からも分かるように、現存する最も息の長い新聞に成長する。創刊号一部三ペンス、二千七百五十

部印刷された。

南島、特にオタゴ地方が注目を浴びるきっかけは、一八五〇年代の金の発見であり、それは一八六〇年代を通して続いた。ボーゲルは卓越した記者として知られるが、彼はその後政治の世界に転じ、蔵相にまでなった。ケインズ経済学の導入者であり、十九世紀後半のニュージールランド社会建設の功労者の一人として知られる。

クライストチャーチでいまなお発行されている『ザ・プレス』は一八六一年五月二十五日、J・E・フィッツジェラルドの手により週刊のタブロイド紙として創刊された。二年後の一八六三年三月からカンタベリー地方最初の日刊紙となった。

以上見てきたように、ニュージールランドの新聞の日刊化は一八六〇年代を待たなければならぬが、入植から二十年間でわずか十五紙しか登場しなかった新聞は、続く二十年間に百八十一紙が創刊され、百紙ほどが生き残る。植民地初期の新聞は入植者が上陸した港に現れ、印刷人が編集人であり、かつ経営者ともなった。一八五一年当時、六居住地合わせて二万六千人ほどの人口の少なさが新聞経営を困難にさせた最大の要因であった。北島では自治政府、南島ではニュージールランド会社の強い影響下にあったこと、電信がまだ到達せずニューズ収集に組織性がなかったことなどが、この時代の新聞の性格を形作ったと言える。

(この項続く。参考文献は次回に掲載の予定)

特攻出撃・幻の大地震

大沢 正作

(同盟クラブ会員)

私は昭和十八年二月、同盟通信社に入社、航空部に配属されました。当時の航空部は住谷金吉・部長、森元治郎・次長以下内勤職員四人、航空機乗員は山内、塚本、大沢、石原、志摩の五人が機長、このほか機関士、航空士、整備士、通信士などがおられました。

私の入社当日、山内機長の中型機が中国の上海付近の揚子江中州の黄砂島に不時着したとの情報が入り、住谷部長が大変緊張して、部屋の人の出入りが激しかったことが記憶に残っています。

そして翌年、今度は志摩機長のダグラス機が台湾沖で米軍のグラマン戦闘機に撃墜されました。志摩さんは当時のわが国航空界では有名なテストパイロットでした。

入社当時の私には、住谷、森、二人の存在がとても大きく、公私さまざまな面で親切なご指導をいただき、早速陸軍航空本部に派遣され、陸軍軍属になりました。

特に森さんのお人柄につきましては、同盟クラブの皆さんは「ご存じの方が多いと思いますが、私には忘れられない多くの話があるのです。

それは、

一、森さんの入社は満州事変発生年の年。入社早々満州に特派され、報道機関として初めて無線を使って他社を圧倒した。

一、その後ワルシャワ特派員になり、第二次世界大戦の口火を切ったナチスドイツのポーランド侵攻の第一報を打電。

一、帰国してマカッサル支社開設。昭和十九年住谷さんと航空部長交代。

一、終戦間近、終戦工作に体を張った。中央公論社から『もう一つの終戦工作』（新書）を出版、映画『黎明八月十五日』の主役となった。

一、終戦後、期するところあつてでしょう。同盟解散の後、片山首相秘書官、参議院議員として活躍された。

この森さんの指示で、私は空から幻の大津波を眺め、特攻隊の出撃を涙で見送ったのです。

昭和十九年十二月七日、森部長は「大沢君、もう日本はおしまいだ。特攻隊を見ておくといい」と、確かこんなふう言って私に宮崎県・新田原基地への出張を命じられたのです。軍属の私は腕に同盟の腕章と軍属バッジを付け、立川飛行場から陸軍機に搭乗しました。

機は海岸線に沿って九州へ向かいましたが、伊勢湾上空に差しかけたところで機長が「同盟さん、海が変ですよ。津波かも知れません」と言うので、機の小窓から下の海を見ると、大きな、不気味な白波が幾条もつねり立って見えました。これが東南海大地震の津波でした。

機は無事、新田原基地に着き、その日は近くの宿屋に泊まりました。翌十二月八日は快晴でしたが、気温は低く寒かったと覚えています。

沖縄海域の米艦船に体当たりに向かう特攻機（神雷隊）の若い学徒兵は私とほぼ同年配です。基地司令官との別れの杯。飛び立つ機上の白いマフラ姿。手を振って発進して行きました。あときの身の引き締まる思いは、五十五年たった今でも頭から離れません。涙が出て仕方ありません。軽々に語れないのです。

特攻隊出撃を見送った後、私は再び陸軍機で立川に戻ることにになり、新田原を飛び立ちました。往路と同様大きな機体の中は空っぽ。座席もなく冷たいジュラルミンに尻を置いていました。

紀伊半島に差しかけたところ、機長から「同盟さん、油圧系統が故障です。不時着します」と説明があり、肝を冷やした。明野基地（三重県）に着陸したときは正直ほっとしました。

汽車で帰ることとし、明野駅（近鉄線）にたどり着いたところ駅員は「地震と津波のため東海道線は不通」と言う。やっとの思いで名古屋屋に出で、中央線を乗り継いで帰社しました。

この東南海大地震は、戦時中で報道管制が敷かれ、後に幻の大地震といわれています。気象庁の記録によると、昭和十九年十二月七日、東南海大地震、死者九八八人、負傷者二、一三六六人、流失、壊れた家約八〇、〇〇〇戸の数字が残っております。

メディア談話室

「女子アナ」とニュース

藤田博司

ニュースと紅白

このところ、気のせいか、週刊誌の広告にやたら「女子アナ」の話題が目につく。彼女たちの「好感度」から私生活まで、どこまで信じていいものか分からないような話が、読者や視聴者の関心をそそると、手を替え品を替えて書き立てられている。なかには個人の名譽を著しく傷つけかねないたくい話もある。

しかし書かれる「女子アナ」や放送局の側から、こうした週刊誌の報道に抗議や訴訟の動きがあったという話はあまり聞かない。彼女たちもそれを「有名税」と考えているのかもしれない。とすれば「女子アナ」自身、記者や編集者と肩を並べて働くジャーナリストとしてよりも「有名人」としての自覚が強いということだろう。

「偽りの有名性」

実際問題として、テレビに登場するキャスターやアナウンサーと呼ばれる人たちは、いや応なく、有名になる。その上「女子アナ」は得てして、ジャーナリストとしての能力よりは、本人の

容姿や話し方、声の質、その人柄などなど、視聴者に与える印象の良しあしで評価されることが多い。そこに、えげつない週刊誌につけ入られるすきがあると見える。

石田佐恵子（大阪市立大学）は『論座』三月号のなかで、最近の「女子アナ」ブームを「作られたブーム」と言い、彼女たちの「有名性」は「偽りの有名性」を連想させる」と指摘している。

石田によれば「テレビに出ること」は有名になること。成功者であること、という短絡的な図式が彼女たちを「有名人」の場所にかさ上げしており、この図式が「一方ではもてはやされ、他方ではバッシングされるという奇妙な場所に彼女たちを連れていくのではないだろうか」という。

ところで、この小文で問題にしたいと考えたのは、テレビの女性アナがタレント化していることではない。彼女たちを興味本位で扱った週刊誌の姿勢でもない。問題にしたいのは、そうした現実を踏まえて放送局の側が彼女たちにどのような役割をさせようとしているのか、である。

昨年末のNHK紅白歌合戦では、夜のニュース番組を担当している若い女性アナが司会者の一人に起用された。司会の出来栄えは問わない。とにかく彼女はお祭り騒ぎの雰囲気盛り上げるために、歌手たちと交じってはしゃいだりはやしたり、懸命だった。しかしその彼女がその後また、以前と同じようにニュースの原稿を読んでいる。そのことに、少なくとも筆者は、少々引つかかるのである。

言つまでもないことだが、ニュースを伝える仕事と歌番組の司会の仕事は、全く性格の異なるものである。前者に必要な最も基本的な要件は、だれにもへつらわず、正直であることである。この要件を貫こうとすれば、歌番組の司会は到底できない。逆に、芸能番組ではしゃいでいるアナウンサーがニュースを読むと、ニュースそのものの信頼性が乏しいような気がするの、見る側の偏見だろうか。

一人のアナウンサーがニュース番組と芸能番組の両方に顔を出すのは、なにも今回が初めてではない。女性アナだけでなく、男性アナでも似たようなケースはしばしば見受けられる。もちろんこれは、アナウンサー個人の問題ではない。こうした人の使い方をする組織の考え方の問題である。もともと娯楽性の高いメディアであるテレビ

は、娯楽番組とニュース番組の間に明確な一線を画しておかねばならない。本来なら、ニュース制作部門と娯楽番組制作部門は組織的にも人事面でもはっきりと分けておくべきだろう。アメリカの三大ネットワークでは、伝統的にニュース部門を他の部門から独立させて、両者の間に一定のけじめをつけている。

あいまいな境界線

しかし日本では、この二つの部門の境界がかねてからあいまいにされてきた。とくに民放は、ワイドショーやバラエティショーで、アナウンサーにタレントまがいのことをさせたり、タレントに記者まがいのことをさせたりして、ニュースと実際情報の垣根を取り壊してしまつた。挙げ句の果てには、キャスターやアナウンサーのなかに、胃腸薬や調味料のコマーシャルに顔を出す人たちまでが現れている。

NHKの場合、民放ほど露骨ではないが、それでもニュースと娯楽の間の垣根を厳格に守ろうとする意識が次第に希薄になりつつあるのではないかと、心配になる。人気女性アナを紅白の司会者に起用するのはともかくとして、その後も相変わらずニュースを担当させるといふのは、筆者の目から見ると無神経すぎる。

もっとも、こうした見方には異論もあるだろう。一つには、もともとアナウンサーは他人の書

いた原稿を読むだけの機械みたいなもの、ニュース原稿を読もうと司会の台本を読もうと大した違いはない、という見方。もう一つは、最近のニュース番組そのものが娯楽化していて、キャスターやアナウンサーにジャーナリストとしての基本的要件など期待していない、という意見。いずれも確かに真実の一面を突いてはいる。

しかし、キャスターやアナウンサーの顔が持つ意味合いや影響力は現実の問題として決して小さなくない。仮にイメージだけにせよ、彼、彼女らの顔がそれぞれの番組の信頼度や好感度を左右する。ニュース番組の場合、とりわけ信頼度を重視すれば、芸能人たちとはしゃぎ回つたアナウンサーの読むニュースに視聴者がどのような反応を見せるか、NHKの責任者は少し考えてみてはどうだろう。

報道現場の意志

日本よりもう少しけじめがあるというアメリカでも、ニュースと娯楽の間の垣根が低くなつてきていることは、これまでにもしばしば指摘されている。一九八〇年代の半ば以降、軟らかな話題ものを扱ったドキュメンタリー風の「テレビマガジン」と称される番組が各局に登場、ニュースと娯楽の間を行く番組が次々に作られた。さらに日本のワイドショーに近い「トークショー」もニュースの娯楽化に拍車をかけた。

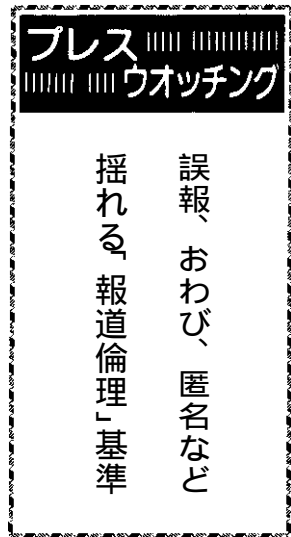
かつてNBC放送がタレント（アメリカではテレビパーソナリティーと呼ばれる）のバーバラ・ウォルターズをニュースキャスターに起用したとき、大きな論議を呼んだ。要するに、ジャーナリストとしての経験のないウォルターズをキャスターにすることへの批判が強かつたのである。結局、彼女のキャスターとしての寿命は長くはなかつた。

アメリカのテレビで活躍する女性のニュースキャスターは少なくないが、そのほとんどは現場での取材経験を相当積んだうえで、才能を（そしておそらくは容姿や人柄も）評価されて起用される人たちである。しかしせっかくキャスターに起用されながら、取材経験の乏しさから仕事の圧力に耐えかねて薬物におぼれ、若くして事故死したジエシカ・サビッチのようなケースもある（『ニュース・キャスター』グウエンタ・ブレア著 岸野郁枝訳）。

日本のように、現場での経験がなくても、容姿や明るい性格、視聴者の好感度などだけでキャスターの仕事を与えられるケースはまずない。そこには曲がりなりにもニュースと娯楽の境界線をきちんと守ろうとする、アメリカの報道現場の意志が感じ取れるような気がする。

日本のテレビの報道現場にはそうした意志があるのかどうか、ニュースと紅白を掛け持ちする「女子アナ」の姿を見てみると、そんな疑問がわいてくる。

（上智大学教授）



揺れる「報道倫理」基準

メディア独自の倫理基準

同じように真実と正義の実現を目指しても、司法とメディアでは適用する基準が随分と違う。「日産サニー事件」の再審請求棄却は、その違いを実感させた。

一九六七年十月福島県いわき市で起きた事件で、元電電公社職員・斉藤嘉昭さん(六一)が強盗殺人罪に問われ、無罪を主張しながら無期懲役刑に服した。事件発生当時の報道は、「容疑者」即「犯人」視一色だった。そして七年前、福島地裁いわき支部が再審開始を決定すると、メディアは犯罪報道について深刻な反省を迫られた。

しかし、その再審決定は仙台高裁で取り消され、三月九日には最高裁第三小法廷(尾崎信裁判長)が最終的に再審請求を棄却した。「疑わしきは被告人の利益に」の鉄則は、再審請求の審理にも適用される」という「白鳥事件決定」(一九七五年五月)の基準は適用されず、最高裁の判断は意外だったし、人権尊重では後退に映る。

斉藤氏のえん罪主張は、法的には否定された。

しかし、メディアは、司法とは一線を画した別の倫理基準にのっとって報道した。

プライバシーが絡んだ報道では、わが国のメディアの判断基準はきわめてあいまいで、扱いに迷ったときはしばしば消極的な報道に傾く。

有罪が確定した被告人や受刑者は、本人がプライバシーを放棄していても匿名扱いとなるケースが多かった(受刑者や死刑囚の提訴事件など)。刑終了者や仮出所者も匿名扱いだから、従来通りなら斉藤氏も「元受刑者」と匿名で報道されただろう。しかし実際には、メディアはそろって「斉藤さん」と敬称付き実名で報道した。

メディアが独自に、斉藤さんはえん罪だと判断したためだろうか。そうだとすると、事実上司法の判断基準を否定したことになるのだが、そうでもなさそう。しかし、報道基準が「疑わしきは人権尊重」へと比重を移したのは歓迎される。

ところで、この最高裁決定を伝えた十一日の朝刊各紙は、従来通り「十日までに決定した」とあいまいに書いている。一市民として最高裁に問い合わせると、「なんのために知りたいのか」と聞き返しながらも、「決定は九日」と教えてくれた。情報の公開度でメディアは随分遅れている。

「誤報」「訂正」の基準はテレビ朝日の「所沢市のダイオキシン報道」からは、報道基準の甘さが感じられる。

情報を受ける側の一般的な判断基準を、「通常人による平均的な視聴のしかた」に置けば、同局

の意図にかかわらず、ダイオキシンの高濃度汚染が「ホウレンソウ」と、一般に受け止められた報道は「誤報」の範囲に含まれるだろう。

一九三八年、オーソン・ウェルズが制作したラジオドラマ「世界戦争」(H・G・ウェルズ原作)が、アメリカ中に「火星人襲来」のパニックを引き起こした故事に学ぶまでもない。

衆院通信委員会が、三月十一日、テレビ朝日の伊藤邦男社長を参考人招致した背景には、メディアへの政治的圧力の気配が歴然と存在する。だが、伊藤社長の発言も決してフェアではなかった(十一日各紙夕刊)。「根拠のない誤報とは考えていない」と答えたが、「根拠がない報道」は、誤報の域を超えた「虚報」だろう。

読者を無視した「おわび」

このところ、メディアの人々と話していると、しばしばギャップを感じる。三月十日の日経朝刊社会面は次のような小さな「おわび」を載せた。

2月23日付朝刊の『オウム』施設を足立区議が視察」の写真で、不適切な表現があったことを関係者におわびします。

しかし、「不適切な表現」とは何か。それには全く触れていない。他紙、例えば二月二十三日の朝日の記事を読んで一つの推定を得た。そこで「(事務所内に)松本被告の子供たちの写真が張られている……」という記述が目についた。

日経が掲載した事務所内の写真には、壁に掛かった松本被告と子供の写真が写っていた。

日経に「おわび」の理由を聞くと、読者相談室は「分からない」と言い、電話が回った社会部で吉田記者が次のように答えてくれた。

「おわびは『関係者』に対するもので、読者に対してではないのです。不適切の内容を明らかにすることはできないのです。あなたが推定する通りかどうかは別にして、本社には、刑事事件被告人の親族のプライバシーは守るといふ基準があることだけは言えます」

プライバシーの侵害はそれを公にしたら、侵害に輪をかけることにならないか。一度侵害したら、賠償するのが筋ではないか。数百万の読者への説明義務はどうなるのか。

国際ニュースオンブズマン協会の事務局長、アート・ナウマン氏に、感想を聞いてみた——

「『おわび』を載せながら、読者に理由を明確に伝えないのはおかしい。『抜けている』ということになる。新聞社が、殺人事件の被告の家族に私的にわびるのは結構なことだ。しかし、紙面上で、公に、何の説明もなしにというのは、読者に問答無用の疑問を投げかけることになる」

サンデイエゴ・ユニオン・トリビュン紙のオンブズマン、ジーナ・ルプラノさんも「読者に事実を伝えるのが新聞。説明なしにおわびを載せて何をしようとしたのか、分からない」と言う。

匿名コラムの公正らしさ

朝日夕刊一面のコラム「窓 論説委員室から」(十日)が、「日本海新聞の田村耕太郎記者が鳥取

県知事選に出馬を表明したあと署名入りの記事を書きつけ、問題になった」「署名記事はやはり自粛すべきだと思つ」と記者倫理を説いた。論説委員会の岩村氏が懇切に答えてくれた。

「これは社論ですか、筆者個人の意見ですか。もちろん個人の意見です」

——田村記者が匿名で書けば問題ないのですか。

「田村記者と推定できるような書き方、例えばイニシャル入りなどはやはりまずいでしょね」

——一般に匿名記事に問題はないのでしょうか。「窓」はどうして匿名コラムなのでしょう。

「このコラムの前身は『今日の問題』という小さな欄だったのですが、その踏襲です」

——同日の朝刊社会面のトップ記事(「不況春闘 社員3分の1リストラ」)は、無署名記事で記事中の当事者もすべて匿名です。記事の信頼性や記者の「公正らしさ」の点から、こういう記事をどう思いますか。

「記者もニュース当事者もできるだけ明らかにした方がいい、という考えもよく分かります」

記事と広告の境界

不況になると、記事と広告・宣伝のけじめがいまいになりがちだ。エジプト・アスワンを紹介した「旅」(二月二十五日読売夕刊)は、そうした一つの典型といえようか。

ルクソールでのテロ事件後、日本人はエジプト

旅行に強い不安を抱いている。記事には、そうした懸念に答える配慮や情報がほとんど含まれていない。「安全」を裏書きしているわけでもない。

アガサ・クリステイヤーが「ナイルに死す」を執筆した一流ホテルで、初めて心底くつろいだ気分になれ、「ヨーロッパ文明という安全圏に身を置けた安堵感だ……」と書いている。それが、読者に緊張を求めるメッセージなのだろうか。

産経の読者サービスマンによると、同紙は一面に広告を載せないという。では、三月九日朝刊の一面の下、真ん中に載った「柔 700系のぞみ 発車まであと4日」という記事と、「700系のぞみ」の写真は何だろうか。記事が広告が、識別はきわどい。

読者サービスマン室は初め「すべて記事」と断言したが、写真に添付された「JR東海」の小さな口ゴを指摘すると、「写真だけ広告」と変更した。

JR東海・東京広報室では、初め「全部広告」と答えた。しかし、産経側の答えを聞くと、最終的に「新聞社取材の記事に広告を合わせた今までにない新しいパターンの試み」という公式見解を伝えてきた。

しかし、産経、JR東海からはともに「記事でも広告でも何が問題なのか」と逆に聞かれた。「記事の責任は新聞社にあり、広告の責任は広告主にある。だから、記事と広告のけじめは明確でなければならぬ」とは、いまや常識ではなくなつたのだろうか。(前澤 猛「東京経済大学教授」)

放送時評

番組のトラブル相次ぐ 過剰演出見直す好機

拙速・ダイオキシン報道

ここにきて番組をめぐるトラブルが相次いで発生、テレビ界ばかりでなく社会的に大きな波紋を投げかけている。

まず、テレビ朝日二月一日の「ニュースステーション」の「汚染地の苦悩——農作物は安全か？」という特集報道による「ダイオキシン騒動」。久米宏キャスターは「JA所沢市が一九九七年に行った野菜のダイオキシン濃度の調査結果をまだ公表していないことに触れたうえで、民間調査機関「環境総合研究所」の別な検査データを語気強く紹介したのが発端である。

「埼玉県・所沢産の野菜から一グラム当たり〇・六四〇三・八〇ピコグラム（ピコは一兆分の一）のダイオキシンが検出された」「三・八〇ピコグラムは世界レベルの百倍」。そして画面に表示し、ホウレンソウを主婦に持たせて「うちは所沢のものは使っていない」と言わせたのだから、産業廃棄物処理問題が大きく指摘されている所沢市だけに、問題にならない方がおかしい。

この調査が数字を列記しただけで、調査方法、サンプル数など肝心のところを明らかにしていないことなどお構いなく、「三・八〇ピコグラム」が独り歩きをし、ホウレンソウをはじめ野菜の値段は暴落し、農家は悲鳴を上げた。県、厚生省、農水省、さらに郵政省まで乗り出す大騒ぎ。

JA所沢市は二月九日、きつかけになった一九九七年の調査結果を公表した。無作為に選んだホウレンソウ七点（畑五、出荷場二）、サトイモ三点でダイオキシン濃度はホウレンソウ平均〇・二七ピコグラムでテレビの最低値より低く、サトイモはゼロ。「国の基準がなく、数字の独り歩きを懸念して公表しなかった」という弁だった。

「ニュースステーション」では当初の「野菜」が「ホウレンソウをメインとする葉っぱのもの」「葉もの野菜」と数値の対象を微妙に変えてきていた。しかし騒ぎに驚いての急場しのぎ。そして埼玉県は二月十八日、問題の調査機関から入手したデータを発表した。

「三・八〇ピコグラムの最大値を示したのは製品にしたせん茶」ということだった。「生菜」ではないわけだし、また「せん茶は湯に溶け出すダイオキシンが〇・〇七六ピコグラム程度。健康に害はない」と安全宣言をされてみると、情勢はテレビ朝日側に不利。数字の選択、援用が「報道の効果を突出させるため」と見られても致し方はない。

二月十八日には久米宏キャスターが「ニュースステーション」で、二十三日には伊藤邦男社長が

記者会見で「表現不適切、説明不十分で農家の皆さんにご迷惑をかけた」と謝罪。また会社側も「細心さを欠き、放送を急いだ」と「拙速」を認めている。

残るヤラセへの疑惑

だが、これで一件落着とは参らない。この報道が国、地方自治体の環境問題、産廃問題への取り組みに警鐘を鳴らしたものであることは確かだが、報道番組のワクを踏み出し、「誇大」「一方的」「偏見」から「虚偽」「ヤラセ」の疑いありといった非難が高まった。加えて平素の「朝日嫌い」「久米嫌い」の週刊誌サイドの集中砲火。例えば、週刊新潮（二・二五）、「とんでもないことをやってくれた久米宏」、同（三・四）「再び捏造（ねつぞう）報道を糾弾する」、週刊文春（三・四）「久米宏とテレビ朝が歪めた「汚染の実態」」などだ。

こうした空気を背景に行政側のクレーム、回答要求が相次いだのだが、郵政省が二月二十五日に発した質問状は「放送法三条の二」報道は事実をまげないですること」に反していないか、確認するための必要最小限の質問（放送行政局）という趣旨だそう、主なものは以下。

ニュースステーションの編集権がテレビ朝日にあるかどうか、焼却炉の映像撮影日時と場所。草の上の白いものを「灰」と認定した根拠。久米キャスターの「おわび」は個人の見解か、局のものか。放送内容は、テレビ朝日の番組基準に従った

ものか——など。

三月十一日の衆院通信委員会はテレビ朝日・伊藤社長、早河洋報道局長、民間放送連盟・酒井昭専務理事、「放送と人権等権利に関する委員会」・清水英夫委員長の四氏を参考人招致、質疑を行った。「ニュースステーション」をテレビ報道の εργασ 視しての批判、攻撃という印象が強く、やはり怒声の中でテレビ朝日側は、所沢の農民の皆さまに改めておわびしたい」「だが、全体としては誤報ではない」という立場は崩さなかった。

回答の概略。「誤報ではないから訂正放送はしない。全体としては正しいが、拙速だった。図表にもミスがあった」「番組編集権はあくまでも同にある」「ねつ造など全くない」「ダイオキシン濃度の数値が現にあるなら、これを出すことに意味があると考えた」——。

このトラブルの根底には、「ニュースステーション」という大報道番組がタレントの久米宏氏とその所属するプロダクションによってすべて仕切られている。また環境総合研究所なる調査機関の幹事メンバーにテレビ朝日、朝日新聞の人たちが加わり、特集番組のディレクター、ホウレンソウを携えて登場した主婦の名も入っており「身内によるヤラセ」ではないか(三・四週刊新潮)という疑惑が介在した——の二点は挙げておく必要がある。功を焦り、視聴率を気にして拙速の愚を犯したのだから、テレビ報道の“過剰演出”を考えるよい機会には違いない。

何ともひどいバラエティー

この問題に隠れた格好になったが、もう一つ世間を騒がせたのはフジテレビ一月二十九日夜の情報バラエティー「ウォンテッド」が登場させた「鬼看護婦」。この番組、「世直しテレビ」のサブタイトルを持ち、コメディアンが司会して実在の、常識のラチ外にある「問題人物」をスタジオに呼び出してしゃべらせ、再現映像を見せ、ゲストの芸能人たちが追及、非難する趣向。

この日の、都内私立病院で働く三十四歳の看護婦は何ともひどいものだった。顔にはボカシをかけてあったが、「白衣の天使なんてウソですね」から始まって再現フィルムを紹介しつつ「植物人間の患者を足げにしたり、ベッドのパイプに頭を打ちつけたりしてストレスを解消する」「気に入らない患者に、わざと、未熟な研修医に点滴を打たせて痛がらせる」「当直時に急患を追い返し、再び来たときには死んでしまっていた」「催眠誘導剤を横流しする」など。そして「だれでもやっていること」とうそぶくのである。

当然放送中から苦情殺到。番組終盤の午後九時近くから午前零時ごろまで電話は五千本を超えた。一方、視聴率は途端に六%も跳ね上がり二ヶタ台に乗っている。これも週刊誌(二・三・五文春)の報道だが「同番組のプロデューサーは強引なことで有名。カゲキな内容に「視聴率稼ぎのためのヤラセか」の声が局内にある」という。事実、同番組の別なコーナーでやった「わが子に暴行/残

酷/鬼母の実態」は、その辺のところをさらに疑うことができる。

日本看護協会、厚生省が番組企画意図、事実関係の説明を要求したのに対して局側は「事実だという確信を持つている。看護婦個人の照会には一切答えられない」と突っ放す。ただし日枝久社長は二月二十五日の記者会見で「社会の問題をやりたいという企画だったが、現実にバラエティー番組で扱ったことで方向がちぐはぐになり、視聴者に不快感を起こした。率直に反省すべきだと思ふ」と語っている。

だが、トップが放送後に謝れば済むというものではあるまい。ドキュメンタリーで扱うべき素材を面白おかしく芸能人たちがサカナにする娯楽系情報バラエティー番組にしてしまうこと、また、軽率、性急に報道番組を先鋭化し、反響ばかりを狙うこと。商戦に急なあまり、最も大事な世の信頼感をなくし、事あるごとに政府サイドの介入を招くのでは元も子も失う。

電通推計による昨年の日本の総広告費は五兆七千五百九十七億円で、五年ぶり前年比割れのマイナス三・五%。マスコミ四媒体もそろってマイナス成長となり、テレビはスポット広告六・〇%減が響いて二・九%減と、これも五年ぶりに前年を下回った。果てしない不況、前途に立ちふさがるネガティブなデジタル化。その故の番組作りの焦燥。正念場というほかはない。

(大森幸男「放送評論家」)

戦争や不況など世相を反映 「昭和メディア史」の周辺

佐伯安彦

(時事総合研究所客員研究員)

大正天皇が一九二六年十二月二十五日に逝去、昭和史は事実上、一九二七年(昭和二年)に始まる。政治面では若槻礼次郎憲政会内閣が台湾銀行救済策の行き詰まりで総辞職した後を受けて、四月に陸軍大将田中義一を首相とする政友会内閣が発足した。五月には中国の山東半島に邦人保護という理由で関東軍の出動(第一次山東出兵)を決定、数年後の日中戦争の予兆が出た年でもある。

経済面では三月の東京渡辺銀行破たんが発火点となった金融恐慌は、高橋是清蔵相の緊急策で収拾されたものの、長い昭和不況の幕開けとなる。芥川龍之介が「将来に対する唯(ただ)ぼんやりとした不安……」との手記を遺(のこ)して自殺したのはこの年七月だし、十二月に築地小劇場で上演された『何が彼女をそうさせたか』(山本安英主演)は好評を呼び、一種の流行語となった。

「こんな女」を尋ねて

この作品は雑誌『改造』一九二七年一月号に掲載された藤森成吉の戯曲に基づくものだが、一九三〇年に帝国キネマによって同名の映画(鈴木重吉監督)が作られ、浅草常盤座と京都恵比寿座で

上映されると、当時としては驚異的な五週連続ヒット作品になり、キネマ旬報の読者投票による「昭和五年優秀映画第一位」に選ばれた。この時代の社会環境を知るために藤森の原作を読もうと思ったが、いわゆるプロレタリア文学として後に発禁となった代物だけに国会図書館はじめ八方手をつくしても見当たらない。あきらめかかっていたところ、一九九七年秋の東京国際映画祭に特別招待作品として渋谷文化村で、一回限りの上映があり、それを見ることで納得した。

粗筋は、純情で美しい少女すみ子(高津慶子)が、家庭の貧しさゆえに曲芸団に売られたり、好色漢に囲われたりした揚げ句教会に送られたが、そこでも偽善の人びとのなぶりものになり、放火に至るといふもの。左翼的視点で社会を批判する傾向映画の典型として、これもおクラ入りとなり、空襲で日本にはフィルムも残っていないが、モスクワ郊外に一本あることが分かり、ロシアの映画関係者の協力により、海を渡って六十年ぶりに日の目を見たということだった。

このように社会悪が犯罪、あるいは退廃を招くという主題は、戦後の一九四七年にティチクレコ

ードから出され、やはりヒットした流行歌『星の流れに』(清水みのる作詞)に受け継がれる。引き揚げ者である看護婦の転落の記を題材にした「どこをめぐらの今日のやど……こんな女にだれがした」という歌詞には、夜の女も戦争の被害者という哀調があり、菊池章子の持ち歌として懐かしのメロディーのの一つとなった。

昭和不況と現在の違い

社会が悪い、戦争が悪い、だから……という決まり文句に疑問符をつけたのが、一九四九年に上映された映画『野良犬』(黒沢明監督)のシーンである。三船敏郎演じる村上刑事はバスの中でピストルをすられ、その弾丸によるとみられる殺人事件が多発、自責の念にかられた村上は必死になつて捜査に歩き回り、殺人犯の情婦ハルミ(井田綾子)を突き止める。犯人遊佐(木村功)は復員列車内でたった一つのリュックサックを盗まれ、貧窮に苦しめられて犯罪に走つたのだ。「悪いのはみんな世の中よ。あの人が悪いのじゃあない」とかばうハルミに対し、村上刑事は静かに言う。「自分も復員兵で、やはりリュックを盗まれた。世の中は悪い。しかし、世の中のせいに(して悪事を)するやつは、もつと悪い」。ハルミはついに村上に協力し、高飛びを図つた遊佐は捕まる。

黒沢作品はいろいろな要素から成っており、この会話が必ずしも『野良犬』の主題ではないが、

「何がそうさせたか」という外的要因重視に対し人間の主体性を主張する視点を持っている。戦後の歌謡界でスターとなった美空ひばりの歌には「金はひとつもなくなっても……空をみたけりやピルの屋根」(『東京キッド』、藤浦洸作詞)、「泣くな迷うな苦しみを抜いてノ人は望みを果たすのさ」(『人生一路』、石本美由起作詞)と「悪条件を乗り越えて」生きていくテーマが多い。

もちろん昭和不況期の「すみ子」と、戦後復興期の「ひばり」とでは、苦しみの質と量が絶対的に違うので、単純に並列するのは適当ではない。現在の平成不況を、昭和初期の状況になぞらえる見方があるが、宮崎勇著『日本経済図説』によると、一九二六年(昭和元年)から一九九三年(平成五年)の間に日本の人口は約二倍、国民総生産は約二十倍、鉱工業生産は約四十倍に増加した。ともあれ、一九二九年、ニューヨークの株式暴落に象徴される世界的な不況の中で、一九三一年満州事変、一九三三年国際連盟脱退、一九三六年青年将校のクーデター未遂(二・二六事件)と日本は戦争への道に歩を進め、メディアの面では、朝日新聞が一九三一年十月一日、『満蒙の独立ノ成功せば極東平和の新保障』との社説で従来の立場を大幅に転換する。

戦前の「時事通信社」

大正から昭和にかけ、主として文化面で活躍した鷺亭金升というジャーナリストの日記(『むだ

雅記』)の一九四一年(昭和十六年)四月三十日のところに「時事通信は本日廃刊す」とあったので、おやと思った。現在の時事通信社は一九四五年十一月の創立だから関係ないのは当然として、『時事通信社五十年史』によると一八八八年(明治二十一年)、「日本初の通信社」として時事通信社が設立されたが、その後、帝國通信社(一八九二年創立)に吸収されている。

金升日記の時事通信を知るべく、この前後を詳細に読むと、金升は一九四〇年二月、これまで勤めていた東京日日新聞(毎日新聞)を退社、その年四月に「時事通信社の演芸部顧問として今日より二時間位勤めることを約す。老人のノジジ通などとノ恥かしき」とある。このメディアは歌舞伎、川柳、落語、音曲など軟派専門の新聞で、時局が非常時となつて姿を消したものと分かった。

同日記は多才な新聞人の筆によるものだけあつて、当時の雰囲気をよく伝えている。例えば一九三六年二月二十六日「社へ出れば『大変大変』人びと騒ぐ。何ぞと問えば今朝六時、軍隊の不穩事件突発、大官危難の報頻々。丸の内は戒厳令が布かれ、雪中に桜田の昔をしのげる大事件なりき。六つの花ノとんだ騒ぎの桜田やノ山の手かけてノ鳴る機関銃」と風流なものである。

また一九三八年八月四日「昨今ラチオは天気を報ぜず。今夜より市中は灯火管制を行う事となる」。一九三九年十月二十六日「防空訓練にて市中実戦の感あり」。一九四〇年七月二日「バルカ

ン風雲急の報あり。世界大乱これよりあらんか。そして一九四一年十二月八日「快晴の朝、ラチオは突然宣戦の詔勅下れりと報ず」。日本は対米戦争に突入した。

メディアも四〇年体制

一九三七年(昭和十二年)七月、盧溝橋事件が起こり、日中が全面戦争に入ると、近衛文麿内閣は一九三八年四月、国家総動員法を公布、メディアの世界も集中・合同が進み、野口悠紀雄氏言うところの「四〇年体制」が形成されていく。これより前、一九三六年に日本電報通信社(電通)一九〇六年創立)の通信部門と新聞聯合社(東方通信社と国際通信社との合併により一九二六年創立)とが合併して、同盟通信社(岩永裕吉社長)が設立され、巨大な国家的通信社となつていた。

国家総動員法二〇条は新聞紙・出版物に対する記事掲載制限や発行停止権限を政府に与えており、商工省による新聞用紙の供給制限(一九三八年)、さらに内務省の「一府県一紙制」指導と併せ、一九四〇年から一九四一年にかけて新聞の整理統合が進行した。一九四一年五月には、「新聞事業の自治的統制団体として……国家的使命を果たす」ことを目的とする新聞聯盟(日本新聞会)が設立され、新聞の共同販売制も実現している。「帝國陸海軍は今八日未明、西太平洋において米英軍と戦争状態に入れり」との大本営発表を報じた一九四一年十二月九日付新聞各紙の社説は、

「一億総進撃の日は来た。待ちに待った日が来た。大君の辺にこそ死なぬ。一切を大君に捧(ささ)げ、興亜大業を目指して奮進するであらう」(東京日日)、「今や皇国の隆替を決するの秋(とき)、一億国民が一切を国家の難に捧げるべき日は来たのである」(朝日)、「矢は弦を離れ(さい)は投げられた。事ここに及んでは最早多くを言う必要はない」(読売)と、こぞって戦意を鼓舞した。翌十日には後樂園球場で朝日、東京日日、読売、中外商業(日経)、報知、都(東京)、国民(同)の七新聞社と同盟通信社の共催で「米英撃滅国民大会」が開かれている。

G H Qによる言論規制

一九四五年(昭和二十年)八月十五日、敗戦によってメディアを取り巻く環境も一変した。連合国軍総司令部(G H Q)の最高司令官として進駐したダグラス・マッカーサーは九月十日、東久邇宮稔彦内閣に「言論および新聞の自由」に関する覚書を交付するが、引き続き九月十五日に発令の「日本に与える新聞遵則」(プレスコード)が実はメディアに対する新たな規制の指針となる。

プレスコードは、ニュースは厳格に真実に符合しななければならない。直接間接を問わず、公共の安寧(あんねい)を乱すような事項を掲載してはならない。連合国に虚偽または破壊的批判をしてはならない。連合国占領軍に対し破壊的な批判を加え、または占領軍に対し不信または恨み

を招くような事項を掲載してはならない。連合国部隊の動静については公式に発表されないかぎり発表または論議してはならない。ニュースの筋は事実どおりを記載し、かつ完全に編集上の意見を除いたものでなければならぬ。ニュースの筋は宣伝の線に沿うよう脚色されてはならない。ニュースの筋は宣伝の企画書を強調または展開するよう針小棒大に扱ってはならない。ニュースの筋は重要事実または細部を省略してこれをゆがめてはならない。新聞編集にあたってはニュースの筋は宣伝の意図を盛り上げ、または展開するため特にある事項を不当に表現してはならない——の十項目。G H Qはこれをもとに、新聞・通信を厳しく検閲、しかも、検閲をしていること自体の公表を禁じた。いわば「消音ピストル作戦」である。

一九四五年九月中にプレスコードに基づいて処分されたのは、同盟通信と朝日新聞の二件だけだったが、それ以降、メディアは「進駐軍の命により」が絶対であることを知る。十月末、同盟通信社は自主的に解散して時事通信社(長谷川才次代表)と共同通信社(伊藤正徳理事長)が発足。十一月にはG H Qの指令によって、戦時中に製作された『あの旗を撃て!』など二百本余の映画が反民主主義との理由で上映禁止・焼却処分を受けた。このころから、毎日、朝日をはじめ新聞社では「戦争責任追及」「社内民主化」の動きが強まって経営陣の交代が相次ぎ、正力松太郎社長が戦犯容疑で拘置された読売の社内争議は長期化する。G

H Qでは民間情報教育局新聞課のインボデン少佐が新聞の在り方について指導の前面に出た。一九四六年十一月に公布、一九四七年五月から施行された日本国憲法は二一条で「言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する」。「検閲はこれをしてはならない」とうたった。しかし、G H Qの検閲は一九四八年にそれまでの事前制から事後制に移ったものの、一九五一年の講和条約調印時まで続き、メディアにとっての圧力となる。

ここ数年、米国の公文書館(ナショナルアーカイブ)の資料公開が進み、占領期のメディア対策の機密もだんだん解除されてきた。例えばG H QのGS(民生局)が日本の特別審査局(後の公安調査庁)と交わした一九四八年六月十日付文書では、時事通信のミス・スズキの記事について、詳しく言及している。鈴木富美子氏は当時としては珍しい女性の政治記者で、国鉄ストや疑獄事件の取材に活躍したが、G H Qは「好ましくない人物」とみていたようだ。冷戦が激化、米国の政策が反ソ連・反共色を強めていったころであった。

時間に余裕が出来てきたので、かねてから興味を持っていた昭和メディア史についての資料をばつばつ集めていたら、編集者の知るところとなり誌面を汚した。また道半ばであり、本来なら完成後に「余話」として書くべきものだが、ご批判やご教示をいただき、今後の長い旅の糧としたい。



LAタイムズがトップに

NYタイムズ抜き悲願達成

大都市の日報紙としてトップ争いを演じてきた高級新聞ロサンゼルス・タイムズとニューヨーク・タイムズだが、LAタイムズ(以下LA)がNYタイムズ(以下NY)を抜いて、大都市の新聞としては米国第一となった。最新の統計で見ると、LAは一九九八年九月末までの六カ月の一平均が、一年前を二万七千部上回って百六万七千五百四十部。NYは八千部減って百六万六千六百五十八部。わずかに一千部弱の差だが、LAがNYを上回ったのは初めてで、LAの発行人、マーク・ウィルズ氏にとっては悲願達成となる。

ただしLAは一部二十五セント、NYは六十セントという価格差も大きな要因。長期的にはニューヨーク市の人口は横ばいだが、ロサンゼルスとその郊外は人口、特に裕福なヒスパニック系の流入で、購買力のある人口の増加が見込めるから、LAの方が有利かもしれない。

日曜版ではNYが百六十万部で、LAは百三十六万部だからまだNYが多い。ウィルズ氏は日曜版でもNYを追い越すことを目標にしている。ただし週日版の千部弱の差はすぐひっくり返る可能性もあるし、競争はし烈になるので、米新聞界で

も注目している。

NYは全国版を各地で発行しており、カリフォルニア州にも進出している。一方LAの親会社であるタイムズ・ミラーが対抗上ニューヨークに乗り込んで発行した「NYニューズデー」は一九九五年に廃刊に追い込まれた(ニューヨーク市郊外の本体「ニューズデー」は五十七万部で全米第八位と好調)。しかしその後全国版を出すなど、LA側のNYとの対抗意識は相当なものだ。ウィルズ氏は長期的には五十万部の増紙を狙って、一九九八年は五万部増を念頭に置いていたから、一年で一万七千部増えても、目標には程遠いともいえる。

また部数は増えても、減収になってしまった点が、利益重視のウィルズ氏には気になるところ。米国の新聞は長い好景気のおかげで大体堅調だが、LAは一九九八年の収入が前年の一一%減になってしまった。広告収入も二・三%と微増である。これにはLAが置かれている特別な事情がある。ロサンゼルスは自動車がないと生活ができない大都会で、自動車文化のページを新設したが、思ったほど広告が集まらなかった。また広告収入の三〇%を占める案内広告の「求人欄」が、アジアの不況と、米国の航空宇宙産業の収縮で大きな打撃を受けた。

ウィルズ氏は米新聞界では異色の人物で、物議を醸すこともしばしば。LAはチャンドラー家の下で百年続いた高級紙として声価を高めていた

が、一九九五年に経営強化のためチャンドラー家が手を引き、ウィルズ氏が本社タイムズ・ミラーの最高経営責任者として乗り込んできた。同氏はもともとはミネアポリス連銀総裁などを務めたエゴノミストで、LAに来る前は朝食のシリアルで有名な食品会社、ジェネラル・ミルズの会長だった。そして一九九八年にLAの発行人となった。元々がエゴノミストで実業家だから、新聞といえども収支を最優先させる型の人である。

編集局にも「ビジネスマネジャー」が配置された。広告主にマイナスの影響を与える記事はないかどうかチェックする。読者とともに広告主のことも考える編集方針を打ち出したのである。新聞もシリアルと同じ消耗品であるから、消費者のし好も優先する、というわけである。これには編集権の独立を主張する編集局が反発、編集局長が抗議して辞任する騒ぎもあつた。赤字続きのNYニューズデー廃刊の決断をしたのも同氏。地域版の一つがペイしないとしてあつさり廃止したこともある。

だが同氏がLAの発行人になって一年、紙面刷新のさまざまな試みがなされて、成功しているものがあることは事実。全国版を発行したのもその一つだし、ヒスパニックのためのセクションを創設するなどもしている。スポーツや暮らしのセクションも大改革した。LAがNYを大きく引き離すか、ウィルズ氏の経営手腕が注目される。

(佐々木謙一 同盟クラブ会員)



政治危機の中の露マスコミ

意図的リークがはんな

三月十五日朝(日本時間)、ロシア国営テレビが放映したエリツィン大統領とプリマコフ首相の会談の様子は甚だ奇妙な具合であった。この会談は入退院を繰り返している大統領が首相をモスクワの中央病院に呼んで行った定例の打ち合わせのような形だったが、冒頭、エリツィン氏はプリマコフ氏とテレビカメラの方を半々に向きながら、こう言ったのである。「大統領と首相の間に楔(くさび)を打ち込もうとしている者がいる。だが、この楔はまだ出来ていない」。テレビの放映で見る限り、プリマコフ氏の方はうなずくだけで、ほとんど無言だった。

このテレビを通じてのエリツィン発言は昨年十二月初め、健康不安を抱える大統領が突然、ロシア軍の代表的存在であるボルデュージャ大將を大統領府長官兼国家安全保障会議書記に任命、それ以来、いわば二重権力となった状態の醸し出す政局不安の鎮静化を図ったものと解される。ボルデュージャ將軍は就任後のイタル・タス通信とのインタビューで「大統領からは政府各機関の調整役としての任務を与えられた」と語っていた。それ以来、首相がいっプリマコフ氏からボルデュージ

ヤ氏に取り換えられるか、これがロシア・マスコミの取材の焦点となつてしまつたのである。

このような政局取材の在り方が好ましくないのは、リークのたぐいの「うわさの政治学」がはんならんし、それが政治論争に利用されることである。三月十五日のテレビ向けのエリツィン発言によく似た事例は一月にもあつた。このとき、プリマコフ氏は一九九九年度予算案を通過させるため下院第一党の共産党選出のセレスニョフ下院議長との間で政治休戦に合意していたが、一月二十七日、エリツィン氏から病院に呼びつけられ、政治休戦問題はボルデュージャ氏所管の安全保障会議にゆだねるよう命じられたと報じられた。

二月二十五日、エリツィン氏はクレムリンに登庁、プリマコフ氏と会談したが、大統領執務室からは、二〇〇〇年に予定される大統領選挙を一九九九年十二月の下院議員選挙の前に繰り上げるかどうかをめくり、両氏が声高に言い争う声が聞こえたと報じられた。その後、ボルデュージャ氏が「意図的なりーク」と否定したが、根も葉もないことではなかつたようだ。翌二十六日に、モスクワ訪問中の朱鎔基中国首相とプリマコフ氏ともども会見したエリツィン氏が、このときも半身でテレビカメラに向かい、「私は二〇〇〇年まで大統領をやる。プリマコフさんはそのときまで首相を務める」と語っているからである。

このほかマスコミ絡みの変な事件が多い。二月二日、スクラトフ検事総長が大統領令によつて解

任された。スクラトフ氏は、かつて女性とともにサウナに入っているところをタブロイド紙に盗み撮りされたコワリヨフ元法相を、別の汚職容疑で摘発しようとしていた。その矢先の解任だった。ロシア憲法上、検事総長の任免は上院の許諾を要するが、その手続きは一切とられなかつた。

三月二日、「独立新聞」は、ロシア共産党がエリツィン政権内の共産党出身の官僚を通じて、一九九四年から一九九七年まで計二百五十万ドルの不正資金を受け取つたと報じた。名指しはなかつたが、共産党出身のマスリニコフ第一副首相やジユガノフ共産党委員長は激怒した。三月五日、旧ソ連十二カ国で構成される独立国家共同体(CIS)のベレゾフスキー書記が同じく大統領令で解任され、ロシア以外のCIS各国首脳から怒りの声が巻き起こつた。ベレゾフスキー氏は新興財閥の総帥の一人で、「独立新聞」の社主でもある。

ただし、「独立新聞」の名譽のために、トレチヤフ編集長が常に「新聞の編集権はジャーナリスト側にあり、ベレゾフスキー社主が介入してきたことは一度もない」と断言していることは付け加えておかなければなるまい。「プリマコフ対ベレゾフスキーの対立」はロシアのマスコミ界に定説化していた。これがだれかの何らかの意図で利用されたのであろう。いずれにせよ、昨年八月に始まる経済危機の深刻化のなかで、ロシアのマスコミはその政治危機のメカニズムに組み込まれてしまった観がある。

(高橋 実「評論家」)

英の国際週刊紙が廃刊

一時は欧州への窓口役果たす

「新しいヨーロッパに向けた国際新聞」と名乗った一つの週刊新聞が、一九九八年十二月二十八日号をもって廃刊となった。それはロンドンを本拠とした『ザ・ユーロピアン』である。ヨーロッパ全土に向けた国際新聞としてはほかに『インタナショナル・ヘラルド・トリビュン』があるだけで、一体化が進むヨーロッパにとっては、この新聞は貴重な存在のはずであった。だがその終刊は、欧州統一通貨「ユーロ」が登場する直前という皮肉なタイミングとなった。

『ユーロピアン』はベルリンの壁が崩壊したあと、ロバート・マクスウェルによって一九九〇年五月に創刊された。マクスウェルはイギリスでルパート・マードックのライバルとして『デーリー・ミラー』グループを中心にメディア王国を築き上げた人物である。

彼は、編集方針に「フランス大革命の理想」を掲げた。当時、ヨーロッパ大陸への反発意識が色濃く漂っていたイギリスに対し、『ユーロピアン』はヨーロッパ大陸への窓を開け放つ役割を果たしたといわれる。広くヨーロッパの政治、経済、金融、文化、美術、そして観光など、さまざまな情

海外情報

報を掲載した新鮮な紙面は読者をとらえ、一九九〇年八月のピーク時には三十四万部に達した。イギリスのみならず、フランス、ドイツ、ハンガリーでも同時印刷された。

ドイツのシュプリングガー・コンツェルンが『デイヴエルト』をグループの旗艦紙としたように、マクスウェルは『ユーロピアン』を、彼のマスコミ王国の旗艦紙と位置付けようとした。しかしコストが増大し、読者の物珍しさが減退していくなかで、『ユーロピアン』はついに黒字になることはなかった。

マクスウェルは一九九一年十一月に所有のクルーザーで地中海を航行中、深夜に不審の転落死を遂げた。死後、彼の王国は破産状態にあることが明らかになった。そしてまた、明るみに出てきたのは、『ユーロピアン』編集部内の実情であった。編集部では、フランス革命の「自由・平等・友愛」の代わりに、マクスウェルが絶対王朝の太陽王ルイ十四世のように支配し、彼の意に従わない編集者は直ちに首になったという。一九九七年まで同紙の報道責任者を務めたピーター・ミラーは、当時の気持ちを、スターリンの召し使いのようであった、と語っている。

『ユーロピアン』は破産し、これをホテルチェーンを経営するパークレー兄弟が救い出した。しかし所有者が代わっても、経営は好転しなかった。発行部数は十三万五千部に落ち込んだ。しかも、その多くは、パークレーのチェーンホテルの

ロビーに無料で積まれる状態であった。新しいヨーロッパを目指した理想も消え、その編集方針に同調した読者も離れていったという。

一九九七年に、イギリスの日曜高級紙『サンデー・タイムズ』の編集長を務めたアンドリュー・ニールが編集長を引き受けた。彼の手で、従来のブランドケット型の新聞から雑誌型に変革し、高級経済雑誌『エコノミスト』と競うことを狙った。ニールは、保守党の代議士であったグリー・マロインを副編集長に選んだ。しかしマロインは、ジャーナリストとしての能力よりも、女性編集者とのスキヤンダルで注目を浴びる結果となった。

これまでに、イギリスで最良の編集者とされる少なからぬ人々が、この新聞のために記事を書いた。一九九六年当時、日本でもパークレーの代理店を通じて『ユーロピアン』を定期購読することができた。しばしば「メディア」欄が登場し、ヨーロッパの最新のメディア状況を伝えてくれ、メディアの動向をフォローするうえで、ありがたい情報源の一つでもあった。

先にマクスウェルを批判したミラーは、「この新聞は、決して飛ぶことはなかったが、だれもが予測していたよりも長くクリスマスを生き延びた七面鳥として、記憶されるだろう」と評した。ドイツのジャーナリズム専門誌に載った『ユーロピアン』への追悼文は、「この新聞のために涙を流すようなことはしない」と締めくくっている。八年余の新聞の命であった。（広瀬英彦「東洋大学教授」）

俳句

虎ノ門句会

平成十一年二月十八日 同盟クラブ

里のバス道祖神前踏のたう 六郎
 転居先貼りし鉄扉の余寒かな 〃
 憂きものうづくまりをる冬日影 多圭子
 しゃりしゃりと老いの手を擦る夜寒かな 〃
 曳き売りの豆腐を買ふや寒の明け 易信
 古都の谷戸梅一輪の陽の温み 〃
 春めくや郵便受けのチヨコレート 義明
 春泥の靴脱ぎ散らす幼稚園 〃
 春めくや原爆地蔵へ千羽鶴 博一
 水仙の雪にも白く凜と立つ 〃

第三十六回時事均一句会
 平成十一年二月二十五日 銀座「味しま」

兼題 「水温む」

天 諸事万般そのままなれど水温む 愚海
 地 水温む下駄をつつかけ矢切まで 岡
 人 太眉にしらが一本水温む 和久
 人 ゆるゆるとほどけゆく恋水温む 久美子
 人 歛音のしづかなりけり水温む 那由太
 ウインドに黄色の帽子水温む 磯
 温む水にひそり横たふ朽木かな 藤原
 ベランダの人の唱歌や水温む 魚酔
 胎児より交信ありて水温む 杉浦

つくばいをうかがう猫や水温む 健次
 水温みぬて指の間の抜け易く 正名
 水温む母を亡くせし娘らに あまり
 糸垂れる背に日とどまり水温む 美佐子
 壮士らも髪撫で付けて水温む 森田
 水温む飛び石苔で色直し 相沢
 子供等の声のはずみや水温む 春楊
 水温むパソソンの花活けかえて 栄郎
 越境の子ら渡渉せり水温む 且住

調査会だより

新聞通信調査会は三月二十四日(水)午後一時
 半から同盟クラブで、岩切司氏(時事通信社産業
 部員)を講師に招き、「二 年問題を考える」
 と題する講演会を開いた。

【新電話番号】

四七一―六九―三三三 坂井 定雄
 ○四二七―四一―二二四〇 山岸 幸男
 (住所は変わりません)
 (局番の変更です)

【悲報】

小海 長寿郎氏(元共同通信社連絡局企画委
 員)脳こうそくのため二月十八日死去。七十九
 歳。喪主は妻文江さん。自宅は東京都世田谷区赤
 堤五―一―一六。
 水谷 千萬樹氏(元時事通信社営業局発送部次
 長)肺がんのため二月二十八日死去。七十九歳。

喪主は女婿政光氏。自宅は東京都品川区小山台一
 一五―一。

目次(四月号)

即位十年、平成流が定着	高橋 紘	1
ニュージールランド新聞史	鈴木 雄雅	4
「昭和メディア史」の周辺	佐伯 安彦	14
特攻出撃・幻の大地震	大沢 正作	7
【メディア談話室】		
「女子アナ」とニュース	藤田 博司	8
【プレスウォッチング】		
誤報、おわび、匿名など	前澤 猛	10
【放送時評】		
過剰演出見直す好機	大森 幸男	12
【海外情報】		
LAタイムズがトップに	佐々木謙一	17
政治危機の中の露マスコミ	高橋 実	18
英の国際週刊紙が廃刊	広瀬 英彦	19
俳句(虎ノ門句会、時事均一句会)		20

定価一五〇円 一年分一五〇〇円(送料とも)
 発行所 財団法人 新聞通信調査会
 〒一五―一 東京都港区虎ノ門一―五―一六
 (晩翠ビル四階)
 (三)三五九三―一 八(代)
 振替口座 一一一―四―七三三六七番
 印刷所 株式会社 太平印刷社
 ©新聞通信調査会1999